第 54 号
(年４回発行)
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

2013年 クリスマス礼拝と音楽の夕べ開催

２０１３年12月12日、本学礼拝堂において、クリスマス礼拝が行われました。厳粛な雰囲気の中、多くの教職員・学生が集い、パイプオルガンや清らかなハンドベルの音に包まれながら、キャンドルを灯し、野辺地教会の白戸清牧師による「マリアのクリスマス」と題してメッセージをいただき、イエスキリストのご降誕を賛美し、共に祝うことができました。

また、同日夜６時30分より、第14回目の「クリスマス音楽の夕べ」が開催されました。

ハンドベルの軽快で清らかな音色で音楽会の幕が開き、楊尚眞宗教主任が聖書朗読と祈祷をされました。第一部は本学の笹森教授の編曲による讃美歌より「シオンの娘」「ああベツレヘムよ」を本学のパイプオルガン奏者竹佐古真希さんとピアノで合奏し、続いて弘前大学フィルハーモニー管弦楽団有志によるバイオリン・ビオラ・チェロによる「G線上のアリア」等を演奏し、男声合唱コール・デル・メディコの息の合ったアカペラで讃美歌等を合唱し聴衆を魅了しました。

第二部は、弘前大学フィルハーモニー管弦楽団有志によるバイオリン・ビオラ・チェロによる「Over the rainbow」「Amazing grace」他を一部より少し緊張がほぐれたように楽しそうに演奏していました。そのあとアカペラでコール・デル・メディコの男声合唱で第二部の演奏を飾りました。

音楽会の最後には、聴衆の皆様と共に「きよしこの夜」を高らかに賛美し、イエス・キリストのご降誕を共にお祝いしました。

(宗教部)

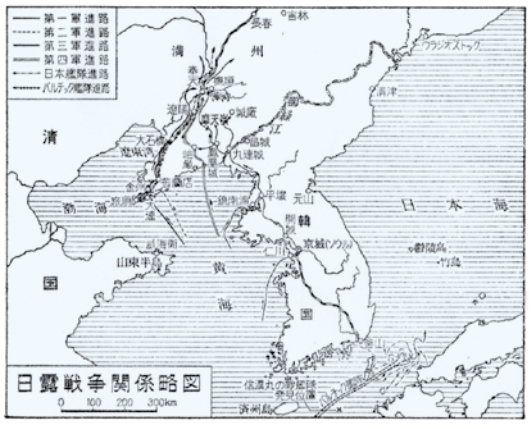
本多庸一とキリスト教(26)

学校法人弘前学院
理事長　阿保　邦弘

日露戦争の開戦過程（一）

日露戦争は一九〇四(明治三十七)年から翌年にかけて、日本とロシアの間で朝鮮・満州の支配をめぐって戦われた戦争である。朝鮮半島を支配することは、日清戦争における日本側の目的であったが、戦争の勝利にもかかわらず、戦後はむしろロシアの政治的影響力が拡大される有様であった。ロシアは一九八九(明治三十一)年三国干渉によって日本に放棄させた遼東半島をみずから租借して、その先端の旅順を海軍基地とし、また清国より満州における鉄道敷設権を獲得して、北満を横断してウラジオストックにいたる鉄道、次いでその中間ハルビンより南下して旅順にいたる南支線の建設に着手した。さらに、一九〇〇(明治三十三)年の義和団事件に際しては、鉄道権益の保護などの名目のもとに大軍を投入して満州を占領、事変後にはその軍事力を背景として、清国に対して　駐兵権など満州支配を進めるようなあらたな権益を要求する姿勢を示した。

このような事態の進行は、朝鮮支配をより困難にすると見た日本政府は、ロシア政府に抗議するとともに、清国政府にもロシアの要求を拒否するよう強く働きかけたが、同時に、日本の地位を国際的に安定・強化する方策が求められるようになった。その具体化が、一九〇二(明治三十五)年に調印された日英同盟であった。それは日本がロシアとの戦争に際してロシアの同盟国フランスの参戦を阻止し、イギリス金融市場での外債募集の可能性を獲得したことを意味した。この年四月ロシアは清国との間で、満州から六ヶ月ずつ三期に分けて、一年半で撤兵を完了するという条約を結んだことは、日英同盟の効果とも見られた。しかしロシアは、第一期撤兵は実行したものの、第二期期限は実行しないのみでなく、あらたな利権要求を清国に突きつけてきた。日本政府はこれに抗議したが、さらに五月からロシアが鴨緑江の森林事業に着手すると、参謀本部などから朝鮮支配のために開戦すべしとの声が高まることになった。日本側の協定案は「韓国における日本の優勢なる利益」と「満州における鉄道経営につき露国の特種なる利益」を相互に承認することを基礎とし、ロシアに「韓国における改革及び善政のため助言及び援助をあたうるは日本の専権に属すること」を認めさせようとするものであった。これに対してロシア側の修正案は、満州におけるロシアの行動に日本が介入する根拠はないとし、また日本の朝鮮に対する軍事的支配に反対して、日本の援助を「民政の改良」だけに限定するとともに、「韓国領土の軍事的使用の禁止」「北緯三十九度以北の韓国領土の中立地帯化」などを要求するものであった。日本側は、韓国国境の両側に五十キロの幅で中立地帯を設けること、日本は満州を、ロシアは韓国を利益範囲外と認めることなどを用意して、韓国についての要求を認めさせようとしたが、ロシア側の態度を変えさせることはできず、一九〇四(明治三十七)年一月十二日の御前会議では、ロシアから満足すべき回答が得られない場合は開戦することが決定された。かくて、二月五日作戦開始命令が下され、十日には正式に宣戦が布告されたのである。



大学基準協会から本学が大学基準に適合していると認証される

学長　吉岡　利忠

２０１３（平成25）年12月に財団法人大学基準協会から、弘前学院大学は本協会の大学基準に適合していると認定する、という内諾を頂いた。正式な認定証などはこの年度内にいただけることになっている。

大学基準協会（ＪＵＡＡ）、一般には馴染みのない名前かも知れませんが、大学など高等教育機関に在籍している私たち教職員は常にこの協会から発する情報などに注意を払っている。この協会の歴史は古く、１９４７（昭和22）年にアメリカのアクレディテーション団体をモデルとして設立された４年制大学を対象とする第三者評価機関であり50年以上を経過している。アクレディテーションとは、「品質・信用の保証」、「基準の合格」などと訳されるが、協会から認定されたことはわが国の大学として弘前学院大学は「お墨付き」を頂いたということでしょう。発足当時は、国公私立の46大学が発起校とした自立大学連合組織であり、「会員の自主的努力と相互的援助によってわが国における大学の資質向上を図る」という目的で、会員の質の向上・保証を行い、今では３００以上の大学が加盟しているということです。わが国には、この協会の他に２つの評価機関があり、一つは国立大学を対象とするもの、もう一つは数年前に新しく設立された団体で私立大学を対象とするものであり、ＪＵＡＡが最も実績があるようです。

さて、前置きが長くなりました。数年前に文部科学省から各大学では、数年に一度は必ず評価を受けなさいと要請があり、弘前学院大学は２００７(平成19)年４月１日付けでＪＵＡＡからの第１回目の認証を頂きました。認証を頂いた時期は他大学に比べて早い方です。今回は第２回目の認証になります。それ以降、第３回目の認証を得るために大学の質を向上させるために努力しなければなりません。この認証を得るためには、大学の理念・目的・教育目標、教育研究組織、教育内容、学生の受け入れ、学生生活、研究環境、社会貢献、教員組織、事務組織、施設・設備、図書・電子媒体、財務、情報公開、などなど多岐にわたる分野で評価委員会によって調査され、すべてをクリアして初めて手にできるものであります。もちろん、現地大学への視察、教員・学生への委員によるインタビューもあり、それらの評価も甘くはありません。認証マークは大学案内や大学から発する種々な資料に付けることができます。

ところで、今回のＪＵＡＡへの弘前学院大学の評価申請にあたり、ＪＵＡＡからの総評として、必ず実現すべき改善事項が三つありました。「学生の受け入れ」、「教員組織」および「財務」の三つでした。その後の申請で「学生の受け入れ」に関しては、文学部、社会福祉学部および看護学部の収容定員に対し意欲的に取り組んでいると評価され、「教員組織」に関しては、各学部とも教授数を含め教員数が満たされ、「財務」に関しては、財政改善計画の見直し、積極的な削減政策、設立１３０周年記念に向けた計画案などが功を奏し健全な財務状況と判断されました。しかし、全体的にさらなる改善・改革が必要ということの総評でありました。また、一層の改善が期待される事項として12点が指摘されましたが、これらに関しても一定の評価ができるということでした。

認定の期間は２０１８（平成30）年３月31日まで。すぐにその時はやってきます。毎年、毎月、毎日、各教職員はＪＵＡＡからの改善事項を肝に銘じ私どもの大学をより良き教育機関になるように努力を重ね、そして多くの学生が私どもの大学で学ぶことを誇りにできる環境を維持していかなければならないと考えています。

2013年度

弘前学院大学学位記授与式

文学部	第40回
社会福祉学部	第12回
看護学部	第６回
大学院社会福祉学研究科修士課程	第10回
大学院文学部研究科修士課程	第８回

◇**日時**：2014(平成26)年3月20日(木)午前10時～
◇**場所**：弘前学院大学体育館

卒業礼拝

◇**日時**：2014(平成26)年３月19日(水)午前10時～
◇**場所**：礼拝堂
＊礼拝終了後、体育館において学位記授与式のリハーサルを行う。

研究紹介㉔

地域で生活する女性の健康増進に向かって

看護学部　助教　松尾　泉

私は、地域で生活する女性の健康増進を目標に研究しています。本稿では弘学時報を手した皆さんに関心を持って欲しい、子宮頸がん予防に関する研究をご紹介します。

子宮頸がんは、検査によって予防・早期発見が可能ながんの一つです。日本のがん検診受診率は低迷し、20～30代女性の罹患率が上昇しています。研究開始時、対象地域の対策型がん検診受診率は14・9％で、全国、全県と比較しても低く、政府の目標とする受診率50％を大きく下回っていました。このうち、がんが疑われる精密検査該当者は99名(1・4％)で、乱暴に計算すると、該当地域には600人近い精密検査該当者が潜在していると推測されました。

医療機関に足を運んでもらいたい、特に、婦人科受診に抵抗を感じているかもしれない若い女性の背中を押したい！という思いで、検診受診率向上に向けた健康教育プログラムを開発することにしました。

まず、市内の検診センターなどに出向き、子宮頸がん検診受診後の女性に臨地調査を行い、10～70代の女性1300人以上から、検診行動の実際や健康感を知ることができました。その結果、契機は様々であっても定期的に受診している女性が多いことが分かりました。若年女性の初回受診の支援により全体の受診率が向上すると考えました。また、受診経験者の健康統制感（Health Locus Control/HLC）が高いことも分かりました。内的統制感が高く「がんは自分で予防できる！」と考える人ほど、検診行動を取りやすいと推測しました。

これらの結果を受けて20～30代女性を対象に出前健康教室「知って防ごう！子宮頸がん」を開催しました。子宮頸がん予防の知識・態度の付与と、受診計画の立案からなる健康教育です。参加者を2群に割り振り、一方には、参加者が自作した受診勧奨ハガキを予定日前に郵送し個別勧奨としました。官製ハガキを用いた簡便な介入方法ですが、3ヶ月後の受診率は、介入群37・0％、統制群27・0％という効果を得ました。また、「自分のことは自分で守る」「医療専門職を活用する」などHLCが高まっていました。

これからも、参加者の健康感が高まるような健康教育を続けたいと考えています。また、妊娠分娩や生活習慣病・更年期症状など女性の健康課題について、HLCの有効性を明らかにしていきたいです。

英語・英米文学会主催の講演会について

英語・英米文学会長　佐藤　和博

本学英語・英米文学会主催の講演会が11月21日（木）、11時15分から開催されました。今回は元JICA（国際協力機構）所属、現在バリューHR弘前データセンター部長、小野修司さんをお招きしました。この日は「英語を学ぶことと進路」と題して、お話していただきました。

講演の中心になったのは、自分の人生と英語との関わりについて、でした。また、JICAの職員として、南アフリカ共和国に駐在していた時の、さまざまな興味深い体験についてもお話がありました。以下は講演の要旨。

(1)自分とは何者なのだろうか？それを知るためには、他人と関わる（異質なものに触れる）しか手段は無い。自分にとって、「英語」と言う言語が未知なる自分に出会うためのツールであった。英語が弘前に住んでいた自分と世界をつないでくれた。

(2)今の世の中は？相互依存を増々強めていく世界の国々である。また、今の日本は？右肩上がりの成長社会（中央志向）から、定常社会（地域志向）に変わりつつある。

(3)このような世界で、これから進路を決めるために必要なスキルとは？

a．人と会話するスキル（聞く／理解＋話す／表現　そして考えて行動する）

b．自分の身の回りの家事をするスキル

c．スポーツ、芸術、読書を楽しむスキル

必要なのは日々の生活で知る多様な選択肢から自分の将来（道）を選ぶ決断力、そして選んだ道を歩むために努力と失敗する勇気を持とう。

当日は英文科の学生を中心に、約40名の参加者があり、1時間という時間の長さを感じさせない熱気あふれる講演となりました。時折、ジョークを言って参加者を笑わせながら、参加者に、これからの進路を考えるに際し、広く海外にも目を向けるよう勇気づけて下さったように思われます。

2013年度

リカレント教育を終えて

リカレント教育委員会　阿部テル子

2013年度の「リカレント教育」は、看護師を対象とした看護研究に関する研修会と、各施設看護師に対する看護研究の指導・助言という二つの方法で実施しました。

研修会は、統一テーマを「臨床実践に役立つ看護研究のあり方」として、弘前学院大学6号館を会場に、10月5日～11月16日の期間内に3回、いずれも土曜日の13時から16時15分まで行いました。その内容は、研究テーマの設定と文献検討、データの収集と分析、データ処理のための情報処理演習、研究論文のまとめ方についての講義と演習で、本学教員と2009年度から本事業にご協力をいただいている岩手県立大学看護学部の福島裕子教授にご担当いただきました。

研修会の内容は、前年度研修会の参加者を対象としたアンケート結果を基に決定しますが、看護研究に関する講義・演習への希望は毎年多く、このテーマと内容での研修会開催は今年度で5年目になります。研究については、今や看護基礎教育の教育内容になっており、看護教育を受けた人であれば誰でも、学生時代に一度は教育を受けていますが、いざ自分が実際に研究をするということになると、改めて勉強の必要性を感じ、研修の機会が求められるようになるのではないかと思われます。

研修会への参加者は、主に医療機関に勤務する看護師で、その他、介護老人保健施設に勤務する看護師の参加も見られました。地域別に見ると弘前市を中心に青森市、黒石市、五所川原市、十和田市、三沢市等に及び、参加人数は各回60名を超える盛況ぶりでした。土曜日の勤務を終え、昼食を摂る間もなく駆けつける看護師もおり、このことからも臨床看護師の研究に関する学習への要望の強さを感じたところです。

各施設看護師に対する看護研究の指導・助言は、今年度は、国立病院機構弘前病院、同青森病院の2施設で行いました。各施設では毎年、看護師が看護に関する研究を行っていますが、皆が研究に精通しているとは限りません。そのために、多くのエネルギーと時間を使って研究を行っても、間違った方法で行ったり、無駄なエネルギーを使ったり、研究結果が信頼性のないものになったりする可能性があります。そこで、研究に関する知識と方法の指導と研究機関である大学と看護実践の場の連携を意図して、本学教員が各施設に出向き、フォローアップ指導として看護師の研究に対する指導・助言を行ってまいりました。研究の成果は今年度も各施設の看護研究発表会で発表されるはずです。

地域貢献、地域との連携の一環として開始・継続してきた本学のリカレント教育は、今年度で9年目となります。事業を継続するには学内・外の多くの方々のご協力をいただきました。また、弘前ライオンズクラブ様からは財政面でのご支援をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また、看護師の研究支援という内容と方法でのリカレント教育は今年度で一応終了し、次年度からは、地域貢献、地域との連携という目的を踏襲しながら、新しい内容でスタートすることになりました。これまでの皆様のご支援に深く感謝申し上げます。

就活祭に参加して

英語・英米文学科　三年　秋元　理子

2014年1月9日、本校の体育館で就活祭が行われました。体育館内に小さなブースをいくつか設け、内定を得た先輩方が、どのように就職活動をしてきたかという流れをパネルディスカッション形式で説明していただきました。新聞社やホテル、金融機関、福祉施設など、さまざまな業種のブースが設けられ、参加した学生の皆さんはそれぞれ興味のあるブースへ足を運び、先輩方の話を熱心に聞いていました。また、説明の最中にメモを取ったり、質疑応答が活発に行われたりなど、就職活動への意欲が大いに表れているシーンも見受けられました。これから就職活動をしていく学生の皆さんにとって、非常に有意義なイベントになったと感じています。

どのような段階を踏んで就職活動をしたらよいかという手引きは、書籍になっていたり、またはインターネット上の就職支援サイトに書かれていたりします。しかし、私たちにとって一番近しい存在である先輩から話を聞くことで、より深く、より詳しく就職活動の内容を聞くことが出来ましたし、同時に就職活動が目前に迫っているという緊張も感じることができました。就職活動中の苦労話や失敗談、移動や宿泊にかかった費用など、実際に体験したからこそ話すことの出来る「生の声」を聞き、就職活動のより具体的なイメージを捉えることができました。

今回この就活祭に参加して私が感じた事は、「就職活動の仕方は十人十色」ということです。受ける企業によって違うということはもちろんありますが、何より自分に合った就職活動の方法というのは、皆さんそれぞれ違うということがよく分かりました。話を聞いていると、内定を得た先輩方は、自分自身のやり方でやり通して成功したのだと強く感じました。就職活動に対し、不安と焦りを抱いているのは私だけではないはずです。そんな私たちのモチベーションを大いに上げてくれた先輩方に感謝しています。私たちが内定を得られた際には、次に就職活動を控えている後輩たちに、自分たちの経験を伝えていけたら良いなと思っています。

英語弁論大会に出場して

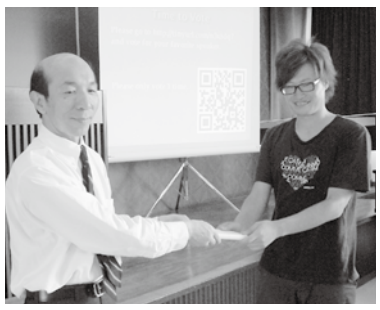
英語・英米文学科三年　佐藤　隆輔

私は今年7月に開催された英語弁論大会に佐藤和博先生の推薦で出場しました。私は宮城県石巻市の出身で、２０１１年に起こった東日本大震災を実際に体験しました。以前からあの震災について多くの人に知ってもらいたいと考えていたため、この英語弁論大会は絶好の機会だと思い出場することを決意しました。テスト期間中で何かと忙しい時期ではありましたが、佐藤和博先生やエドワード・フォーサイス先生に原稿の添削や演説の練習などたくさん協力していただきました。先生方の協力のおかげで、短い準備期間ではありましたが、自分の伝えたかった震災当時の被災地の状況、今の被災地の現状、震災から自分が感じ、学んだことを5分という短い時間の中で演説できる量にまとめることができました。

当日は本館で一番大きな４１４教室に本学の1年生をはじめ、想像以上に大勢の聴衆が集まり、あまり大勢の前で何かを話すという経験もなく、さらに英語での演説ということもあり、自分の順番が来るまではとても緊張したのを覚えています。自分の順番になり前に立つと、自分でも驚くほどにリラックスしながら演説することができました。途中、当時の光景を思い出し言葉に詰まった場面もありましたが、大きなミスもなく、満足できる演説ができたと思っています。他の5名の出場者もそれぞれとても素晴らしい内容で聞き入ってしまいました。

結果は2位でしたが、あの震災について自分の周りで実際に起こった出来事や、そこから自分が感じ、学んだことを大勢の人に知ってもらうことができたので大変満足しています。あの震災について多くの人に知ってもらうため、また、あの震災を過去のものとして風化させないために、今後も様々な場面で伝えていきたいです。

英語弁論大会は学内で自分の考えを大勢の人の前で発表する数少ない機会の内の一つです。英語での演説ということで大変なことも多いと思いますが、それ以上に得られるものは多いと思います。英語での演説に抵抗があるかもしれませんが英文科の学生に限らず、全学部の学生におすすめしたいです。来年の英語弁論大会に出場してみてはいかがでしょうか。



白神山地世界遺産登録二〇周年記念植樹について

看護学部教授　片桐　康雄

平成二五年十一月十六日(土)、白神山地世界遺産登録二〇周年を記念して看護学部前の法面にブナの苗木を植樹する式典が行われた。

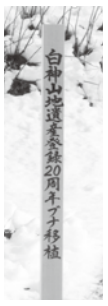
式典は楊尚眞宗教主任の祈祷に始まり、ジャパン・ブナ・フェスティバル委員会代表の根深誠氏、阿保邦弘弘前学院理事長、吉岡利忠学長、東北森林管理局津軽森林管理所署長の高崎道人氏の挨拶の後、阿保理事長、吉岡学長、櫛引美代子看護学部長の三名による記念植樹が行われた。また、教職員と学生たちや西目屋村の職員ら約三十名により西目屋村湯ノ沢国有林から運んだ合計十本の苗木が植えられた。

委員長の根深　誠氏は「ブナを緑化木として街に植え、白神山地をイメージした街づくりをしようという活動の第一歩となった。理解と協力の輪が広がって白神山地と周辺市町村の一体化した『世界遺産の街』につながればいい」と挨拶した。

白神山地は世界一のブナ林が残り、天然記念物のクマゲラはじめ、貴重な動植物が生息している。しかし、高度経済成長期に多くのブナ林が伐採され、杉の人工林に置き変えられていった。さらに白神山地の核心部を貫く青秋林道の建設計画が浮上したことで自然保護を訴える声が全国的に沸き上がり、反対運動が起きて結局林道計画は中止され、その後、世界遺産として登録された。その運動の中心にいた根深氏はジャパン・ブナ・フェスティバル委員会を通じて、全国各地の人だちからの援助を受けてブナ林の再生事業を行ってきた。これまで三万七千二百本の苗木を植えてきたという。それらの苗木は全国の人だちからの寄付により植えられたので間伐などはせずに津軽一円の学校や公園、あるいは街路樹として移植、利用していけたら良いのではないかと提案している。

弘前学院大学がこの趣旨に応じて真っ先に植樹を行ったことで、ＮＨＫやＲＡＢなどのテレビ局や東奥日報、陸奥新報の地元紙はじめ朝日新聞、毎日新聞、河北新報など多くの取材陣も駆けつけた。反響の大きさには驚いた。

式典には間に合わなかったが、後日、西目屋村のご好意により看護学部前に「白神山地遺産登録20周年ブナ移植」としたため



られた檜材の標柱が建てられた。

現在、移植された十本のブナの苗木は深い雪の中で静かに春を待っているが、白神の夢でも見ているのだろうか。この春からの一年をかけて根を張り、幹の成長に転ずるのは来年以降になるという。ブナの成長は決して早くはないらしい。二十年後、三十年後、弘前学院とともに立派な大樹に成長していくことを祈りたい。

この事業にご協力いただいた多くの皆様に心より御礼申し上げます。

クラブ紹介

演奏の楽しさと喜び

弘前学院大学吹奏楽部　日本語・日本文学科二年　長谷川文香

私たち弘前学院大学吹奏楽部は、『マルチプルパフォーマンス』という名前で活動しています。活動は主に文化祭での発表に加え、外部でのボランティア演奏です。三年生が引退し、パーカッション、トランペット、トロンボーン、ユーフォニウム、ホルン、チューバ、サックス、フルート、クラリネットの編の総勢十八名で週二回活動しています。

昨年は文化祭と、施設で一回、弘前市土手町で二回、演奏させていただきました。文化祭以外は全員で参加することが難しいのですが、精いっぱいの演奏をお届けしています。

私たちはコンクールなどの大会に出場することはできませんし、大きなステージで演奏することもありません。けれども、自由に演奏し、耳を傾けてくれる方々の笑顔をエネルギーにして頑張っています。ステージでの曲編成もその場に合わせて行っています。子供向けのステージなら馴染みのアニメの曲を取り入れたり、ご年配の方の多いステージでは昔ながらの曲や有名なテレビ番組の曲を演奏したりします。

大きいステージでの演奏はできませんが、私たちは演奏を聴きに来てくださる方の顔や仕草を近くで感じ取ることができます。手拍子をしてくださったり、笑顔で聴いていただけている様子を見ることができたりすることが、私たちの喜びであり、「吹奏楽をしていて良かった」と思える瞬間でもあります。私たちの演奏を聴いてくださる方々に支えられて成り立っていると言っても過言ではありません。

私たち弘前学院大学吹奏楽部マルチプルパフォーマンスは、少人数ながらも精いっぱい頑張っていきますので、皆様の応援よろしくお願いいたします。

わが茶道部の実態

弘前学院大学茶道部部長　日本語・日本文学科二年　中畑　美波

初めて茶道に触れたのは、まだ保育園に通っていた頃。教養の一環として何回か参加したが、お菓子が美味しかったという記憶しかない。

次は、高校生のとき。これは映像として見ただけである。ＮＨＫの大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」で、主人公の江と利休が一緒のシーンで数回ちらっと見た程度。あとは、秀吉絡みのシーンで数回見ただけ。抱いていたイメージとしては、敷居が高い、きまりや作法にうるさい、お淑やかな女性やお嬢様がやるものといった感じだった。

しかし、実際茶道部入部してみると結構面白いもので、今まで抱いていたイメージとはかなり違う部の実態に、入部当初はかなり安心した。

まず、よくイメージされるお淑やかな女性やお嬢様は幻想である。もう一度言う。幻想である。大事なことなので二回言いました。

大体はオタクか何かのファンで、一月三十日現在、わが茶道部は部員の百パーセントがオタクである。故に、特定の話題になるとかなりうるさくなり、部活が終わるまで喋りっぱなしのときがしばしばある。（ちゃんとお稽古はしています）。

次に、誤解されがちだが、練習日の全てのお稽古で和菓子を食べているわけではない。お稽古に使うのはスーパーで買って来たお値段がお得なクッキーや煎餅などが殆どで、和菓子を使うのは特別な行事がある時のみである。ちなみに、ケーキなどの洋菓子もお稽古に使えるらしい。

この事実を知ったとき、いつか懐紙の上にケーキを乗せるのが私の野望となった。

茶道単体としては、和の心、おもてなしの心を学べるし、礼儀や優雅な所作を身につけることができる。教養として身につけておけば、自分の為になるのではないだろうか。

談話室

Making friends and meeting people

英語・英米文学科　講師
エドワード・フォーサイス

One of the hardest things for people to do is to talk to new people or make new friends. It can be scary to take the first step to talk to somebody new because you do not know who they are or how they feel about you. This can make it even more difficult to learn a foreign language, because practicing speaking is an important part of learning a language. Having someone to practice speaking with can make learning a language much easier and much more fun.

Coming to university can be a very shocking experience because everything is new and students have a lot of new freedoms that they did not have as high school students. To have the best possible experience, it is important to make new friends as soon as possible. Find someone who is like you-maybe from the same town, has the same goal for the future, or has a similar interest or the same hobby or club activity as you and introduce yourself. When meeting foreigners for the first time, you should remember that foreigners in Japan are usually interested in Japan and Japanese culture, so they are usually willing and anxious to meet Japanese people. So introducing yourself will be greeted with a smile. Saying “hello” is usually easy, but many Japanese people have trouble continuing a conversation. Just remember that after you say “Hi” or “Hello,” all you have to do is to continue to introduce yourself and find something that you have in common. Don’t be afraid-say hello and make a new friend.

第６回　卒業研究発表を終えて

看護学部四年　小野寺美佳

第６回卒業研究発表会が平成25年12月７日(土)に開催されました。

私たち看護学部４年生は、２月に指導教員が決定してから約10カ月間、看護実習や就職活動、国家試験対策と並行して卒業研究を進めてきました。

私は、「看護学生におけるストレスと表情認知能力の関係」をテーマとし、研究を進めてきました。自分は日常生活や実習の場面で相手の表情を正しく認知できていたのか、そんな小さな疑問から始まった研究でしたが、表情認知に影響を及ぼす因子や特性について先行研究より把握し、「ストレス」が表情認知に及ぼす影響について調査していくこととなりました。

まずは研究計画書で研究背景や研究で明らかにしたいことを明確化し、調査の方法、分析方法等研究全体の骨組みを考えました。この計画書は倫理審査に必要であるだけでなく、刺激図版の作成時や分析をしているとき、そして論文を書いているときなど、研究を進めるうちに自分の中で迷いが生じたときに「自分はこの研究を通して何を明らかにしたいのか」という原点に戻り、考えさせてくれるものとなりました。

図版の作成では研究協力者の協力の下に、何度も撮り直しを行いました。また、プレテストを実施し、他者から見ても同じ表情に見えるかを確認する必要があり、なかなか期待する結果が得られないことも多く、研究の難しさを実感しました。しかし、自分が明らかにしたい疑問を明確にして持ち続け、考えられる考察をひとつずつ裏付けしていくこと、そして、多忙な中面談等の機会を設けたり、適宜指導してくださった指導教員のサポートやゼミのメンバーの協力によって、研究を進めることができました。

卒業研究発表会は、発表者が今年は昨年より多い59名でした。当日の会場は先生方を始め下級生など多くの人が集まり、張り詰めた空気が流れ、学生は発表が近づくにつれて緊張した面持ちでした。しかし、発表の際は大きなアクシデントもなく、７分の発表と２分の質疑応答はあっという間に過ぎ、全員が無事に発表を終えることができました。

約１年を通して取り組んだ「看護研究」は本当に大変でしたが、長期間にわたり継続して課題に取り組む貴重な体験ができたと思います。今後、臨床で勤務する際にもこの貴重な体験を生かしていきたいと思います。

卒業研究を終えましたが、来る２月には看護師・保健師の国家試験が待ち構えています。４年生全員が精一杯の努力をし、合格して本学を卒業できるよう頑張っていきたいと思います。

第６回　ヒロガク福祉創造フォーラム

学生代表（社会福祉学部三年）　佐藤　大貴

２０１３年11月10日、本学学生や地域住民、卒業生などが集い、「第６回ヒロガク福祉創造フォーラム」が１１５教室と第３会議室で行われました。当日は、朝からの豪雨というあいにくの天気にも関わらず、多くの方がお越しくださいました。地域の方々や卒業生の方々、先生方、職員の方々など多くの皆様の支えにより、開催することができました。学生を代表して心より感謝申し上げます。

昨年、第５回ヒロガク福祉創造フォーラムを終えた後、学生間で「来年もやろう」と意気込み、年明けから「第６回ヒロガク福祉創造フォーラム」に向けた新たな活動を始めました。今年のプログラムは例年と異なり、全て学生が勉強してきたことを発表しました。全部で６つあるグループは、「つながろう福祉の輪」というテーマの意味を意識してそれぞれ興味ある分野を勉強してきました。

午前中は、高齢者グループと障がい者グループが発表しました。高齢者グループは、「高齢者の生活を考える～地域とのつながりの中で～」と題して、地域における高齢者の孤立予防の方法について発表をしました。孤立問題と向き合うためには、住民全体が一体となることが欠かせません。そのような現状に対して、笑顔をもち孤立と向き合うというヒントを住民の方々から頂き、学生に出来ることを模索しました。

障がい者グループは、障がい者の雇用問題や精神障がい者の社会的入院についての発表をしました。雇用の問題については、今年度から法定雇用率が上がったが、本当に障がい者雇用が進むのかどうか、また地域の問題として捉えたときに、どのようなことが考えられるかということを発表しました。学生からは、障害者納付金制度を現在の５万円から倍の10万円にするという意見が出されました。また、地域の問題としては、ボランティアを通して障がい者の就労支援のサポートをすることが考えられます。社会的入院の住宅問題については、それが解消しても新たな問題が生じます。生き生きと自分らしく、生活の中身も作っていかなければなりません。そこで今回は、社会的入院の解消がもたらす住宅の問題、そして地域での孤立を防ぐための方法を考えました。

お昼は、施設の方が作っているパンや納豆を販売し、多くの方々が購入されていました。また、ワークショップ「現場の方と一緒に社会福祉の古典・名著を読む」を開き、学生や教員、地域住民、現場の方と一緒に読書会を行いました。

午後からは、４つのグループが報告しました。温泉グループは、近年、問題になっている青森県民の平均寿命の短さを取り上げました。この問題の背景には三大死因の死亡率、生活習慣病の発症率の高さがあるといわれています。そこで、青森県が国内有数の温泉県であり、温泉には様々な効能があることに着目し、その特性を生かした短命県返上のヒントを得ることはできないかということを考えました。

生協グループは、身近にある生協の歴史や、地域福祉の担い手としてどのようなことを行っているのかということを報告しました。この報告では、地域福祉はどうしたらもっと良くなっていくのかということや、他機関との連携のあり方を考えました。

子どもグループは、親子関係についての発表を行いました。子どもにとって親は信頼できる存在だが、虐待を受けている子は上手く親子関係が構築されていないのではないかという問題があります。また、学生という立場からは、学生だからこそボランティアなどで子どもたちと触れ合うことが出来るのではないかという意見が出されました。

ボランティアグループは、不自由な生活を強いられている被災者の住環境、ボランティア活動を通しての障がい児との関わり、ボランティアで感じた専門職としての支援者についての発表をしました。

以上の多様な発表は、今回のフォーラムのテーマである「つながろう福祉の輪」の第一歩となったのではないかと思います。ヒロガクから地域に向けて発信をし、人と人をつなげるきっかけになればよいと思います。長時間にわたり、最後までたくさんの方が私たちの報告を聞いて下さいました。当日お越しくださった方々からは、「学生さんたちが一生懸命やっていて好印象を持ちました。皆さんの若いエネルギーに期待しています」という声や「良い勉強になったのでまた来たいです」といった声を多く頂きました。私たちの今後の課題は、「実践力を養うこと」です。それぞれのグループで学んできたことを今後どのように実践していくのかということを考えていきたいと思います。

フォーラムが終わり、数か月が経ちました。さらに遡れば私たちが「第６回ヒロガク福祉創造フォーラム」を立ち上げてから１年が経ちました。それぞれ学生スタッフがフォーラムを通して学んだこと得たことがあります。それぞれ学んだことを今後の生活に活かしていきたいと思います。

今後も、「ヒロガク福祉創造フォーラム」が日々の学習の積み重ねを大切にして継続されることを願います。

学内就職セミナー　文学部・社会福祉学部

平成二十五年度学内就職セミナー文学部・社会福祉学部合同の事業所説明会を一月十日（金）本学体育館において実施した。参加した事業所は昨年度より数社多い、五十四事業所で内訳は、一般企業三十三社・社会福祉施設十四法人・官公庁四施設・就職支援業者三社であった。

本セミナーは、新規学卒採用予定事業所より採用担当者を招き、事業所が求める人物像や業界の現状・将来性等を話していただき、これから本格化する就職に向けての職業観・勤労観を養い、希望とする業界の就職情報を収集し就職内定へ繋げることを主目的としている。

実施方法は、昨年度好評であった事業所側の説明を一回三十分とし、終了後説明を受ける学生を総入れ替え、計五回行った。学生の参加は、三・四年生含めて一〇四名であった。

今回のセミナーの様子は、この冬一番の寒波到来にも関わらず、各ブース熱気に包まれたトークがやりとりされていた。中でも、希望とする事業所へ吾先へと出向く学生の姿は就職への強い意欲の現れであり、その説明を聞く姿勢や眼差しはこれからの厳しい就職戦線を乗り切る強い証に思われた。

セミナー実施後の学生アンケート結果からは、就職意欲の向上や事業所が求める人物像、望む事業所の情報収集が得られたと多くの学生が回答している。今回のセミナーがさらに学生の就職意欲に火を付けたことは間違いないものと思われる。

また、事業所側のアンケート結果からは、本学の学生の印象として、全体的に真面目で、誠実で明るく、熱心な学生が多いと回答している。これらは、本学の学生に対して高い人物評価を事業所側がしていただいたものと自負している。

学生の就職は、これからが本番であり、セミナーを通して事業所側から得た種々の情報を就職内定への道しるべとして活用し、チャレンジ精神を持ち続け未だに厳しい就職戦線を乗り切って欲しいと心から念じている一人である。

（就職課）